

令和4年度

# 少年の主張埼玉県大会 作品集

私たちの  
**熱い思い**を  
届けます!



埼玉県マスコット  
「コバトン・さいたまっち」

主催：埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議・  
独立行政法人国立青少年教育振興機構



協賛：Humming Bird未来基金・埼玉キワニスクラブ・公益財団法人埼玉YMCA・  
羽石電気工業株式会社・森乳業株式会社・株式会社埼玉りそな銀行・  
株式会社テレビ埼玉・株式会社埼玉新聞社

# 大会発表者の皆さん



おくつ ともか  
奥津 智佳さん

## 小学生の部



すずき こういちろう  
鈴木 昊一郎さん



たかだ まほ  
高田 真帆さん



つちや けんたろう  
土屋 憲太郎さん



ほんだ まこと  
本多 真人さん



おの かずと  
大野 和登さん

## 中学生の部



かい はやと  
甲斐 迅翔さん



はぎわら なるみ  
萩原 成美さん



はやし すずな  
林 紗愛さん



ムフタル フララさん



たかはし しょか  
高橋 緒夏さん

## 高校生・ 一般の部



にへい ゆつき  
二瓶 優月さん



ねもと みそら  
根本 美空さん



はしもと みう  
橋本 美羽さん



わたなべ なみえ  
渡辺 なみえさん

# はじめに



皆さん、こんにちは。青少年育成埼玉県民会議、埼玉県、埼玉県教育委員会及び独立行政法人国立青少年教育振興機構の主催で、去る8月21日に41回目となる「少年の主張埼玉県大会」を開催しました。

今回の大会には、39,886点の応募があり、その中から選ばれた15名の発表者が、日常生活や学校生活の中での気づきや疑問、そこから得た自身の考えを堂々と発表されました。発表者の皆さんにとっても貴重な経験になったと思います。

今回の大会では、差別や人権問題などの社会問題のほか、言葉の持つ力、命の大切さなどについて力強く訴える主張が発表されました。いずれの主張にも共通して、他者に対する思いやりが感じられ、大変心強く思いました。

現代社会は、様々な面において価値観が多様化しています。時には考え方の違いから他者とのすれ違いが生じることもあるでしょう。そのようなときこそ、一人一人が思いやりの気持ちを持って、相手に接することが大切です。今回の大会に参加された皆さんには、個々の違いを認め、尊重しつつ協働していく共生社会の実現に向けて、できることから取り組んでいってほしいと思います。

そして、この大会への参加を通じて得た考えを更に深め、皆さんの夢や希望に向かって果敢に挑戦を続けていってほしいと思います。皆さんの活躍を大いに期待しています。

この冊子は、大会発表者15名の主張を作品集としてまとめたものです。

是非多くの方々にお読みいただき、青少年の夢や希望、熱き思いに共感していただければ幸いです。

結びに、日頃から青少年の健全育成に御尽力いただいている皆様には感謝申し上げますとともに、大会の開催に当たり御協力をいただいた皆様には心からお礼を申し上げます。

令和4年12月

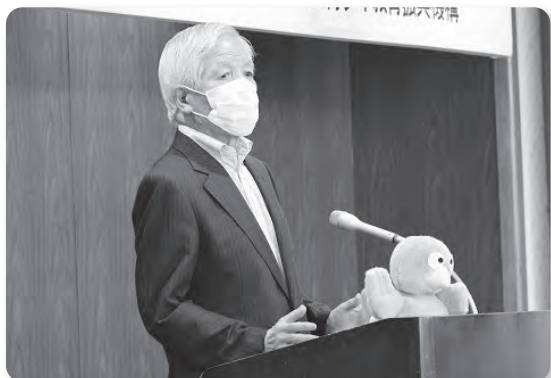
青少年育成埼玉県民会議会長  
埼玉県知事 大野 元裕



# 目次

・はじめに（青少年育成埼玉県民会議会長 埼玉県知事 大野 元裕）	
・大会の様様	1ページ
(小学生の部)	
最優秀賞 「『 <sup>ドリームボックス</sup> 夢の箱』は、もういらぬい」	
さいたま市立西原小学校 6年	すずき こういちろう 鈴木 昊一郎さん …… 3ページ
優秀賞 「言葉は国境をこえる」	
三郷市立新和小学校 4年	たかだ まほ 高田 真帆さん …… 4ページ
優良賞 「みんなの社会」	
越谷市立桜井南小学校 6年	おくつ ともか 奥津 智佳さん …… 5ページ
優良賞 「お母さんの100文字」	
日高市立高根小学校 6年	つちや けんたろう 土屋 憲太郎さん …… 6ページ
優良賞 「夢に向かって」	
加須市立大越小学校 6年	ほんだ まこと 本多 真人さん …… 7ページ
(中学生の部)	
最優秀賞 「万の言葉の力」	
越谷市立中央中学校 3年	かい はやと 甲斐 迅翔さん …… 8ページ
※ 甲斐 迅翔さんは、第44回少年の主張全国大会努力賞を受賞しました。	
優秀賞 「会いたい人」	
三郷市立早稲田中学校 3年	ムフタル フララさん …… 9ページ
優良賞 「ぼくが大切にしたいこと」	
桜丘中学校 1年	おおの かずと 大野 和登さん …… 10ページ
優良賞 「ヘッドネーション」	
草加市立両新田中学校 1年	はぎわら なるみ 萩原 成美さん …… 11ページ
優良賞 「全ての命を大切に」	
加須市立騎西中学校 3年	はやし すずな 林 紗愛さん …… 12ページ
(高校生・一般の部)	
最優秀賞 「アンコンシャス・バイアス」	
埼玉県立豊岡高等学校 1年	たかはし しよか 高橋 緒夏さん …… 13ページ
優秀賞 「見えない差別」	
埼玉県立草加南高等学校 3年	わたなべ なみえさん …… 14ページ
優良賞 「考えることを止めない」	
星野高等学校 1年	にへい ゆづき 二瓶 優月さん …… 15ページ
優良賞 「相手の立場になって」	
埼玉県立熊谷西高等学校 1年	ねもと みそら 根本 美空さん …… 16ページ
優良賞 「誰かを思いやるために」	
埼玉栄高等学校 2年	はしもと みう 橋本 美羽さん …… 17ページ
・特別賞の紹介	18ページ
・講評（株式会社埼玉新聞社編集局長 砂生 敏一氏）	20ページ
・大会の概要	21ページ

# 大会の様相



開会の挨拶  
(青少年育成埼玉県民会議 前島富雄副会長)



会場の様子

## 令和4年度少年の主張埼玉県大会

埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構



発表の様子(小学生の部)

## 令和4年度少年の主張埼玉県大会

埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構



発表の様子(中学生の部)



発表の様子(高校生・一般の部)



審査の様子



ミニコンサート  
(路上のヴァイオリン弾き 安藤善一氏)



講評  
(株式会社埼玉新聞社 砂生敏一編集局長)



最優秀賞【知事賞】の授与  
(青少年育成埼玉県民会議 柿沼トミ子副会長)



優秀賞【教育長賞】の授与  
(埼玉県教育局 石川薫県立学校部長)



優良賞【青少年育成埼玉県民会議会長賞】の授与  
(青少年育成埼玉県民会議 芦澤吉一副会長)



記念写真



## (小学生の部 最優秀賞)

# ドリームボックス 「『夢の箱』は、 もういらない」

さいたま市立西原小学校 6年

鈴木 昊一郎



まさか自分が最優秀賞とわたくしは特別賞をとれるとは思いませんでした。柴子ちゃんも天国で喜んでいると思います。人も動物も幸せに暮らせるように学んでいきたいです。ありがとうございました。

みなさんは「ドリームボックス」を知っていますか？「夢の箱」楽しそうな名前ですがこれは飼えなくなった動物たちの殺処分に使われる機械の名前です。動物たちは保健所に預けられてから7日間の間に飼い主が引き取りに来なければボタンひとつで動く金属せいのかべに押され最後はせまい通路を通過してドリームボックスと呼ばれるガス室に追いこまれ、炭酸ガスによってちっ息死させられます。

最初はほえたりおびえたりしている動物たちもドリームボックスに近づくにつれて、まるで死をさどっているかのように静かにあきらめた顔になってしまいます。そしてドリームボックスの中には動物たちのもがき苦しんだ爪あとがたくさん残っているそうです。

最近では新型コロナウイルスの影響で旅行などの外出ができない人やしを求めてペットを飼い始める人がふえているそうです。

しかし、さまざまな理由で動物たちを保健所に連れてくる人もふえています。「においが気になる」「しつけが思ったより大変だった」「世話できない」「うるさい」これを聞いてぼくはあ然としました。そして怒りを覚えました。

人間はお風呂に入ったり服を着がえたりするしトイレで排せつをします。犬や猫の毛が抜けるのは服の代わりだしうんちがくさいのはみんな同じです。

しつけをするということは動物たちに人間のルールを知ってもらって、おたがいが気持ち良く幸せに暮らすために必要なことです。決してぼう力や支配するためのものではないのです。

ペットショップでは小さくてかわいいところだけを見てぬいぐるみのおもちゃを買うような気持ちではないのでしょうか？その動物の命の責任をとるといふ覚悟がなければぼくは動物を飼ってはいけないと思います。

ぼくの家には柴子という名前の柴犬がいました。19さいで死んでしまいましたが、おばあちゃんになってからの世話は本当に大変でした。白内しょうで目が見えなくなってエサとまちがえて指をかまれたこともあります。おむつになり自分で立てなくなって老犬用のハーネスで支えながら何十分も歩かせたこともあります。お世話があるので遊ぶ時間やお出かけも短時間しかできません。

家族みんなで協力し合ってもとても大変でしたが死んでしまった時は、とても悲しくてとても泣きました。柴子ちゃんはぼくの大切な家族でした。

生き物のお世話をするのは、当たり前のことです。同じ飼われている犬なのに、ある犬は「うるさい、くさい」と保健所に連れられて、ガス室で苦しみながら死んでしまいます。ある犬は家族にお世話されながら最後まで住みなれた家で一生を終えます。

なぜ同じ犬なのに、こんなに命に差があるのでしょうか？どうしてそんなひどいことができるのかとぼくはとても悲しく不思議な気持ちになりました。具合が悪くなった子供を病気だからと捨てますか？服を着がえさせるのがめんどうだからと家から追い出しますか？引っ越し先の部屋が足りないからと親や兄弟を置き去りにできますか？人間相手なら絶対にしないことを犬や猫にはできてしまう。これはまちがったことではないでしょうか？

さいたま市には動物愛ごふれあいセンターという組織があり、しつけ教室を行ったり迷子になった動物の情報を公開しています。また、ボランティアの団体と協力して里親を探したりしています。

そしてボランティア団体では引き取った動物たちを再び不幸にしないために、愛情をこめて世話をしして幸せになれる新しい家族を探すお手伝いをしています。

殺処分ゼロを目指すためにぼくたちができることは、まず動物を飼う人間たちの意識を変えることです。その場の勢いで飼わずしつけ方法や動物の特ちょうを調べてからむかえ入れたほうがいいと思います。お金もたくさんかかります。エサ代や予防せしゅ代、病院代などです。柴子ちゃんも老犬になってからは毎週病院で点てき治りょうをしていました。そこまでのことが必ずできると覚ごした人しか動物と一緒に暮らす資格はありません。

このようにみんなの意識を変え協力して殺処分ゼロを目指し大人になったらぼくもそういった活動をしていきたいです。

でも本当はぼくが大人になった時には捨てられる動物がゼロになってドリームボックスがこの世からなくなってほしいと思います。

## (小学生の部 優秀賞)

# 「言葉は国境をこえる」

三郷市立新和小学校 4年

高田 真帆

日本には、何人の外国人が住んでいると思いますか？約300万人の人が住んでいます。私が住んでいる三郷市には、約3千人の外国人が住んでいます。

私の母は、「外国人に日本語を教えるボランティアをしたい」と話していました。母は日本語を教える勉強会に見学に行き、私もついていくことになりました。教わっている外国人とお話しをしていると、その人は、こう話していました。「子どもとのほうが話しやすい。」「子どものやわらかい雰囲気は、リラックスしながら教わることができる。」私は、嬉しくなりました。しかしこの時、あることに気が付きました。周りをよく見ると、ボランティアの人たちは大人ばかりで、子どもがいなかったのです。

日本に住んでいる外国人の中には、様々な理由で日本語を話せない人がたくさんいると思います。日本語が話せないから、行きたいところに行き物に行けず、日常生活で不便に感じている人もいます。それでも、日本語を理解しようと頑張っている人もいます。私は、そんな人たち全員が、日本をもっともっと好きになって、日本の良さを知ってもらいたい、日本語を知ってほしいと思いました。

自分にできることはなんだろう。まだ小学4年生。たった9歳の私には、何ができるのだろう。たくさん考えて、浮かんできたのは、日本語指導のボランティアでした。「そうだ！お母さんと一緒に、たくさんの人に日本語を教えてあげよう。日本語を知ってもらって、楽しく生活してほしい。」そう思うようになりました。

私は、日本で生まれて日本語で育ち、当たり前のように日本語を話しています。だから、不便に感じたことはないし、学校で困ったこともありません。でも、外国語の授業の時に、ALTの先生の話していることが、全く分かりませんでした。ゆっくり話してもらっても、笑顔で話しかけられても、



たくさんの人の中で発表する機会があまりなかったのですが、堂々と話せて良かったです。正しい日本語を外国人に教えられるようにしっかり学び、笑顔でせっていきたいです。

何を話しているか分かりません。なぜなら、先生は英語を話していたからです。私の脳内は、はてなが浮かび、どんなに聞き取ろうとしても、英語が左から右に、通り過ぎて行ってしまいます。この時、不便さを感じている外国人の気持ちが、初めて分かったのです。話したいこと、伝えたいことはたくさんあるのに、何と言ったらいいのか分からない。言葉が分からないとは、こんなに苦しいのか、こんなに不安なのかと、実感しました。

日本語指導のボランティアと言っても、ただ日本語をゆっくり話して教えるだけでは、楽しくないと思いました。どうやったら、楽しく、分かりやすく教えられるか、考えてみました。一つは、日本語だけではなく、英語も知っておくことです。ほんの少し、短い単語でもいいから、簡単な英語を覚えておけば、少しでもわかりやすいと思います。二つ目は、話したり、書いたりすることです。音声だけではなく、字の形も見ながら、発音していけば、字も知ることになります。そして最後に、コミュニケーションです。笑顔を絶やさず、いつでも優しく教えるよ、一緒に頑張ろう！という気持ちを、笑顔や態度で表していきます。

私は、言葉に国境はあると思います。それでも今回、日本語ボランティアとして活動していく中で、人の思いがあれば、国境は越えられると思いました。学びたい、教えたい、共に生活したい。助け合いたい。それぞれの思いがあり、それぞれの人が頑張れば、思いはつながって、言葉の壁を超えることができるのです。そうすれば、外国人に対する偏見や差別はなくなり、平和な世の中になるのです。私も日本を一步出て、別の国に行けば、外国人になります。全ての人が、どの国でも生きやすい、生活しやすい世の中になることを願い、私はこれからも、日本語指導のボランティアを続けていきます。いつか、言葉に国境はない！と笑顔で言えるように…。



## 「みんなの社会」

越谷市立桜井南小学校 6年

奥津 智佳



最初の発表でとても緊張しました。みんなの発表を聞いて、色々な考えや世界が、他にもあることを知りました。これからもたくさん勉強と経験をして、私の世界を広げていきたいです。

わたしは保育園のころ、男の子の友だちがいました。その友だちとは1才のころからずっといしょで、どろ遊びをしたり、走ったりしてとても楽しかったことを覚えています。その友だちは、体がとても大きかったので、おもちゃの取り合いなどで毎回勝ち、クラスでもだんだん目立つようになっていました。ときには他の友だちにけがをさせてしまうこともありました。そのたびに、その友だちのお母さんがすごくあやまっているところを見るようになりました。わたしは、「なぜあの子はらんぼうなことをするのだろう。なぜ『ごめんね。』と言えないのだろう。」とっていました。

ある時、わたしはその子が「自閉症」という障がいをもっていることを知りました。自閉症は発達障がいの一つで、他人とうまく関わるのが苦手なのだそうです。だから、いじわるをしたくてしているのではなく、『ごめんね。』が言いたくなくて言わないのではないことを知りました。

ある日、わたしはその友だちに太ももをかまれてしまうことがありました。その友だちのお母さんは、わたしとわたしの母にすごくあやまりました。でも、わたしは、「その子には優しいところもあるよ。『ごめんね。』が言えないのは、成長するスピードが他の人より少しゆっくりなだけ。明日には『ごめんね。』が言えるかも。」と伝えました。その友だちのお母さんは、「ありがとう。」と泣いて泣いていました。わたしは、『ごめんね。』よりも『ありがとう。』と言われたことで、その友だち

の思いや困っている気持ちに少しでもよりそえたような気がして、うれしくなりました。

わたしは、発達障がい「性格」と同じだととらえています。わたしの友だちにもいろいろな性格の子がいます。おとなしい子、元気な子、おこりっぽい子、まじめな子など、友達はたくさんいるけれど、みんな性格も、顔も、得意なことも、苦手なこともちがいます。わたしも、初めて会った人と話すのはあまり得意ではなく、他にも苦手なことやものはあります。どんな人でも、友だちになれたらたくさんその人のことを知って、もっと仲良くなりたいなと思います。障がいがあってもなくても、わたしの大切な友だちであることにかわりはないので、たくさんその人のいいところを知って、困っている時は助けてあげたいです。

わたしは、障がいがあってもなくても、人々が関われる、仲良くなれる社会になるといいと思っています。人々がだれとでも仲良くできることで、一人一人がその人のいいところをみとめ、相手に思いやりの気持ちをもてるような、あたたかい社会になると思います。むずかしいことかもしれないけれど、まずはみんなが障がいのことについて知り、理解すること、そして、どうしたら仲良くなれるかを考えられることが大事だと思います。そのはじめの一步をわたしから始められるように、これからも人との関わりを大切にしていきたいです。

## (小学生の部 優良賞)

# 「お母さんの100文字」

日高市立高根小学校 6年

土屋 憲太郎



人前で発表する事になり、やりたくなかった。お母さんにやるなら途中で逃げるなど言われた。発表が終わるととても気持ちがよかった。逃げずに発表した事でお父さんお母さんボクはいい事が1つ増えた。

夏休みの終わりごろ、とつぜんお母さんに言われた。「ママのいいところを100個紙に書いて。何でもいいから100個書いてね」それだけボクに言って紙をわたし、お母さんは仕事に行ってしまった。

「大変だなー」と思いながら書いてみたが、2つ書いて止まってしまった。

①ちゃんとボクの時間を作ってくれる

②仕事から帰って来たら料理を作ってくれる

そこまで書いて「本当に大変だなー」となって、書くのをやめた。

お昼にお母さんから「だいじょうぶ?」「ごはん食べた?」「部屋あつくない?」「れいぼうつけてる?」と聞かれ、「だいじょうぶだよー。ごはん食べたよー」とボクは答えた。お母さんはいつもお昼に電話してきて、いつも同じ事を聞く。

今日はボクの方から、「100個書けないよ。書かなきゃダメ?。48個書いたよ、もうないよ」と言ったけど、お母さんは、「えー。48個書いたの?」「スゴイね」「でも100個書かないとダメだよ。100個書くやくそくだよ」と言い、またボクは、「大変だなー」と思った。

お母さんが夜仕事から帰ってくるまでに、何と

か100個書き終わった。

ボクはお母さんが帰ってきてすぐに「100個書けたよ」と伝えたら、「すごい。書けたの」と、お母さんは言って①番から声を出してよみはじめた。

お母さんはボクの横で、声を出して笑っていた。全部よみ終わるとお母さんはボクに、「お母さんのいいところを100個書いてみて、どんな気持ちになった?」と聞いてきた。ボクは、「お母さんのいいところがいっぱいわかった」と言った。お母さんは「何?」「何て言ったの?」と何度も聞いてきた。

お母さんはニヤニヤしながら今度は、「なみだ出た?」と聞いてきた。ボクは、「なみだは出なかったけど書いてよかった」と言った。ボクは100個書くまで1日中お母さんのいいところを考えた。「ボクを生んでくれてありがとう」と言ったら、お母さんはすごくうれしそうで、ちょっと泣きそうな顔になった。

何だかボクは、「生んでくれてありがとう」と言いたい気持ちになった。

お母さんは何度も同じ事をボクに聞いてきて「そんなにうれしかったんだな」「言ってよかった」と思った。

## (小学生の部 優良賞)

# 「夢に向かって」

加須市立大越小学校 6年

本多 真人



この大会を通して自分の将来の夢に向かって前よりもっとがんばろうと思いました。たくさん人の前ではすごく緊張したけど練習の成果を発揮し上手に発表できました。

『一粒の米にも万人の力が加わっています。一滴の水にも天地の恵みがこもっています。ありがとうございます。』

『いただきます。』

お寺の宿舎に泊まり、仏教や仏様の教えについて学ぶ研修会で唱える食事のときの言葉です。

加須市の北部、大越地区に900年ほど続くお寺、宝幢寺が、ぼくの家です。父も祖父も住職をしており、代々受け継がれてきた宝幢寺を守ってきました。

父や祖父のような住職になること。それが、ぼくの将来の夢です。

ぼくが、「住職になりたい。」と思うようになったのは小学校2年生の時です。生活科の学習で町探検をした時の探検場所の一つが、ぼくの家、宝幢寺でした。ぼくは、その時に初めて、父からお寺について詳しい話を聞きました。「こんなに長い歴史があるのか。ぼくの家ってすごいな。」お寺のことについて語る父の姿は、とてもかっこよく見えました。

憧れをもって父のことを見ていると住職の仕事や仕事に対する気持ちが見えてきました。

宝幢寺では、毎朝6時に鐘をつきます。太い檀木で力を込めて鐘をつくと、大越地区に「ゴーン〜」という音が鳴り響きます。昔、お寺は地域の人々に時を知らせる重要な役割を担っていました。その鐘が、ずっと受け継がれているのです。

また、「新しい朝が来ました。今日も1日、地域の皆さんが穏やかに健やかに過ごせますように。」という願いも込められているのです。

亡くなった方やご先祖様の供養であるお葬式や法事を執り行うことも大切な仕事です。供養をする方の人柄を思い、亡くなくてもなおその方を大切に考え、お経を唱えているのだそうです。

お墓や墓地の草取りや樹木の手入れ、枯れてしまった花の片付けもよくやっています。ぼくも時々手伝いますが、草が生い茂る夏の暑いときに

は大変な仕事です。「お寺に来てくださった方々が、心清らかにお参りできるようにお墓や墓地をきれいに整えておかないとなりません。」と、父は言います。

檀家さんに親しまれ、人に優しく、自分に厳しい父。始めたことは最後までやり通し、地域のために住職としてがんばる父をぼくは、尊敬しています。

父のようになるために、ぼくには今から大切にしていることがあります。

一つ目は、お墓参りです。春と秋のお彼岸、夏のお盆、冬の大晦日。季節ごとのお墓参りはもちろん、毎日の生活の中でもできるだけ手を合わせてお参りをしています。亡くなった方々を忘れずに感謝の気持ちを伝えていくためです。この気持ちはこれからも大切にしていきます。

二つ目は、掃除です。お墓や本堂の掃除は、父と一緒にいきます。「宝幢寺に来てくれた人が気持ちよくお墓参りをしてくれますように。」という気持ちを込めて掃除をすると、ぼく自身も気持ちよくなるから不思議です。

三つ目は、勉強です。住職になるためにはお寺について、たくさん学ばなければなりません。「青少年研修」という、お寺での研修会も年に数回、参加しています。

学校の勉強も大切です。目標を決めてがんばるようにしています。自分で決めたことを最後までやりきる力を身につけたいです。

そして、四つ目は、人に対する気持ちです。ぼくの周りにいるたくさんの人に感謝すること。大切にすること。思いやること。ぼくは、みんなのことが大好きです。

お寺を継ぐことは簡単ではないけれど、努力を続ければ、必ず父や祖父のような立派な住職になれると思います。父や祖父が守ってきた宝幢寺が、これからも地域に愛され、誇れる寺であり続けるようにがんばります。



## 「万の言葉の力」

越谷市立中央中学校 3年

甲斐 迅翔



他の素晴らしい発表者の中、最優秀賞を頂けたこと大変光栄に思います。これから「万の言葉」を大切に、多くの人に自分の考えや思いを届けられるような大人になりたいです。

「思い出させてくれて、ありがとう。」

背が高く、格好の良いスーパースターにそう言われて、僕はすごくびっくりした。その人の名は、プロ野球オリックス・バファローズの投手、山崎福也さん。当時、小学校4年生だった僕が、生まれて初めて出会ったプロスポーツ選手だ。僕が書いた読書感想文の表彰式にゲストとして来てくれた福也さんは、僕の書いた文を読んで、そう言ってくれたのだ。いつもテレビで見ている雲の上の人のような存在。でもそんな人が、僕のような子どもに向かって、とてもうれしそうに話してくれた。福也さんは、小児脳腫瘍を発症し、それを克服してプロ野球選手になったすごい人だ。握手をした手は、とても大きくて温かかった。僕の書いた言葉の力が、福也さんを笑顔にしてくれ、結びつけてくれたのだと思うとうれしかった。表彰式で会っただけの福也さんが、1年後の野球雑誌のインタビューに僕の作文の事を話してくれて、それが記事になっていたことを知った時には、さらにびっくりした。僕の書いた言葉が、福也さんの心に残っていたのだとわかり、とてもうれしかった。文を書くことに自信を持つことができたのと同時に、言葉のもつ力の違大さに気付いた。

言葉には、人を動かす力がある。いつまでも心に残って、人を励まし、支え続ける力もある。がんばる力を引き出したり、あきらめないで、もう一歩、前へ進もうとしたりする力もある。その反面、人の心を深く傷付けたり、ずっと心に残って攻撃され続けているような痛みを感じたりすることもある。生きる気力すら、奪ってしまう力もある。言葉は諸刃の剣だ。使い方を間違えると、傷付けてしまうこともある。例え同じ言葉を使ったとしても、相手の考えや気持ちによっては、深く傷付けてしまうこともあるから、口に出す前によ

く考え、慎重に言葉を選んでいかなければならない。

僕も学校で、友達の言葉に心を動かされたことがある。それは、僕が大切な家族を亡くしたばかりの時の話だ。その頃の僕は、人の生死について、とても敏感になっていた。休み時間に、いつものようにふざけあっていたクラスメイトが言った「死ぬよ。」とか「ぶっ殺してやる。」などの言葉に、本気じゃないとわかっていても、聞いているだけで苦しくて暗い気持ちになった。そんな時、「甲斐さんは、おじいさんが亡くなって悲しい気持ちなんだから、生死に関わるような事を言わないで。」と注意してくれた人がいた。うれしかった。マイナスに向かっていく僕の心をプラスに向けてくれたその言葉に、温かい優しさを感じた。誰かの心を思いやる言葉も、人の心を動かしてくれるのだと知った。

言葉の力を考えた時、ふと「言葉」という文字の語源が気になった。調べてみると、面白いことがわかった。「言葉」の始まりは、奈良時代で、当時は「こと」と言われていたそうだ。それを、平安時代に紀貫之が、「やまとうたは 人の心を種として よろづのことの葉とぞなれりける」と詠み、そこから「言葉」という字が定着したと言われているそうだ。人の心を種として、言葉が葉っぱのように生まれていく様子を表しているのだとしたら、それこそが人の思いを表し、言葉に力を与えているのではないだろうか。僕は、まだたくさんの言葉を知らない。本を読み、学び、調べ、考えていくことで、よろずの言葉を使い、人の心を動かす文が書けるようになりたい。人を温かく、優しい気持ちにさせる言葉を使えるようになりたい。言葉の力を正しく理解し、使える大人になりたいと思う。

## (中学生の部 優秀賞)

# 「会いたい人」

三郷市立早稲田中学校 3年  
ムフタル フララ



今回、少年の主張といった形で、自分の考えを表現出来たのは大変良い経験となりました。胸の中で渦巻いているものは、このように文字に起こすことにより、自分の感情を客観視出来ます。

「何故、私はウイグル人なのだろう。」幼い頃から、度々そう考えることがあった。日常生活のふとした瞬間に、その疑問が脳裏をよぎるのだ。

私は、祖父母と対面をしたことがない。祖父母の手の温もり、体の温かみを感じたことが無いのである。これは、一般的な日本人には、理解し難い感覚であろう。

この世に存在する殆どの子供は、祖父母からの愛情をなみなみと注がれて育つ。「おばあちゃんからお年玉貰った!」「おじいちゃん家へお泊まりに行く!」何気なく放たれる同年代の友人の言葉には、その愛情をひしひしと感じられるものが多い。その時々、私には注がれたことのないその愛情を、それを受け取る感覚を、どうにか理解しようとした。しかし、いつも心に残されるのは、埋めようのない空白感と、少しの嫉妬であった。

それでも、年に数回、祖父母とビデオ通話を出来る機会があった。薄い板の中に写し出される祖父母の顔。見るたびに喜びで体が震えた。回数を重ねるごとに、増えていく目尻の皺や、白くなる髪の毛を見ると、形容し難い焦りと、喉の渇きに襲われたものだ。けれど、その優しい声には、心の渇きを忘れさせてくれる程の効果があつた。

「いつの日か、実際に会うことも出来るのでは。」

束の間の幸せは、淡い希望を与えてくれた。

そんな私をよそに、時は残酷であった。父方の祖父が亡くなったのだ。享年 63 歳であった。

早朝に告げられた便りの言葉を、私は理解が出来なかった。ただ、滲んでゆく視界の端に写った、父のゆがんだ表情は、今も目に焼きついて離れない。

無論、通夜にも葬式にも参列することは出来ない。そんな時に、涙を流すことしか出来ない、無能な自分を祟り、非情な神を呪い、無情な時間を恨んだ。心の中は、大きな大きな虚無と、憎悪に

よって支配された。

「新疆ウイグル問題」。これまで、メディアでも数多く取り上げられてきた。そして、その問題が、私と祖父母との間に高く聳え、遮ってきたのである。

安価なTシャツ、ズボン、ワンピース、靴。「ファストファッション」。最先端の流行を採り入れながらも、低価格な衣料品を販売するブランド業態のことだ。貴方は、その裏側を知っているだろうか。そこには、自由を奪われ、低賃金、劣悪な環境下で働かされている人々の姿がある。

まず、ウイグルではこの、強制労働が行われている。事実、中国綿の8割以上は、新疆ウイグル自治区で生産されているのだ。中国が世界の工場と呼ばれている理由、これを知った上で改めて考えてもらいたい。

ウイグルには強制労働よりも深刻で、より大きな問題がある。

「ジェノサイド」。この言葉に聞き覚えはあるだろうか。これは、大量虐殺を意味する。

中国当局は、ウイグル社会を担ってきた知識人を、不当に強制収容所へ送っているのだ。彼らの狙いはウイグルという存在自体の消滅であると考える。

そんな状況下であるウイグルが、ルーツの私。幼い頃はそれが嫌だった。だけれど、今ではむしろ誇りである。ウイグル人であるということが。

自分の境遇、周囲の環境によって、価値観の違いが生まれるのは当然のことである。しかし、それによる非道徳的な行為は、容認が出来ない。世界中、皆が仲良くなろう。綺麗事である。しかし、この世には綺麗事が必要だ。価値観の違いも、許容し合おう。

今、一つだけ願いが叶うとするのなら、会いたい、祖母の命が尽きるまでに一。

# 「ぼくが大切に したいこと」

桜丘中学校 1年  
大野 和登



音楽は楽器や声によって音色が変わります。それと一緒に、弟はみんなと少しちがうけれど、そこがステキで、そんな弟がぼくは好きです。ぼくもいつか自分だけの音色を見つけたいと思います。

「だあ、だあ、いい、いい。」

ぼくがひくピアノの演奏に合わせて、弟が声を出して笑っています。体をくるくる回らせたり、不思議なリズムを取りながら、ぼくからはなれようとしません。ぼくも何だかうれしくなって、いつもより早くひいてみたり、1オクターブ上でひいてみたり、つい調子に乗ってしまいます。弟はぼくの演奏の一番のファンなのです。

ぼくには2才の弟がいます。弟は言葉がまだ話せません。言葉の意味も理解出来ず、一人でご飯を食べたり、一人でトイレに行くことも出来ません。いつも家中を走り回って、色々な物を投げたり、落としたりします。ぼくはそんな弟が少し苦手でした。

弟が生まれると分かった時は本当にうれしくて、早く一緒に遊びたい！ぼくのこと何て呼んでくれるんだろう！とわくわくしていました。けれど、実際はぼくが思っている弟とはちがいました。弟はぼくには全く興味がなくて、名前を呼んでもふり向いてもくれません。何かしてあげようと思っても、すぐに泣くか怒ってしまいます。そんなぼくを見てお母さんが、弟はみんなよりも発達がゆっくりなんだと教えてくれました。ショックでした。一緒に遊ぼうと思っていたのに。お兄ちゃんって呼んでもらいたかったのに。

ぼくはそれから逃げるように、毎日ピアノをひくようになりました。ピアノをひいている時間が、

ぼくだけの時間に思えたからです。

そんなある日、弟がぼくのピアノの側にやってきました。いつもは電車以外には何も興味を持たない弟が、ピアノをさわりたがったのです。ぼくは弟を自分の上に座らせて、けんばんをおして見せました。すると弟が声を出して笑い始めました。ぼくはびっくりして、次はドレミファソラシドと連続でひいてみると、弟はケタケタ楽しそうに笑います。まるで弟には、音以外の何かが見えているかのように。

ぼくは弟と、言葉でコミュニケーションを取ること出来ません。けれど、ぼくがピアノをひいたり歌をうたうと、弟の気持ちがぼくに伝わってくる気がします。ぼくはピアノがすごく上手というわけではないですし、たくさん曲をひくことは出来ません。それでも弟は、いつも楽しそうにぼくの演奏を聞いてくれます。そんなぼく達を見て、家族みんなが笑顔になります。それが、ぼくは本当にうれしくて仕方ありません。

ぼくの夢は音楽家になることです。ぼくの奏でるピアノや歌で世界中の人を笑顔にしたいからです。ぼくがこの気持ちになったのは、弟がいてくれたからだだと思います。今では弟が、ぼくの演奏の一番のファンで、一番の理解者です。弟が笑顔になれば、ぼくも家族も心から幸せを感じ、笑うことが出来ます。そんな弟の笑顔をぼくはずっと大切にしたいと思います。



## (中学生の部 優良賞)

# 「ヘアドネーション」

草加市立両新田中学校 1年

萩原 成美



自分が体験して思った事を皆様の前で発表できてとても嬉しかったです。発表の場では緊張で声が小さくなってしまいました。私の想いを書いた作文が誰かの想いに寄り添う事ができたら光栄です。

「40センチは切るよ。費用は3千円位かな。」  
美容院の人に言われた時、「そんなに切っちゃうの…」と母の心の声が聞こえた気がしました。

私は小学3年生の頃、腰まで伸ばした髪をヘアドネーションしました。ヘアドネーションとは、小児ガンや先天性の脱毛症、不りよの事故などで頭髪を失ってしまった子供にウィッグを作り寄付する運動です。ウィッグにするための頭髪を寄付する事が私達一般に出来る運動になります。

私はヘアドネーションをTVのドキュメンタリー番組で知りました。ガンの治療で髪の毛をなくしてしまった子供がプレゼントされたウィッグをつけた時嬉しそうな笑顔になった所が印象に残りました。私はこの番組を見た時に、ふと自分が小さな頃の事を思い出しました。私は新生児の時にビタミンK欠乏症による頭がい内出血の手術で頭髪を失いました。開頭手術だったため、メスが入った頭の傷あとからは一生髪の毛は生えて来ません。瘢痕性禿髪というものです。また術後はしばらくの間、髪の毛にまで栄養が行き渡らず他の部分の髪が生えそろうまでは4年はかかったそうです。それまでの期間は、髪の毛はうすくて短かったので男の子と間違われていたそうです。私の名前を聞いて「えー!! あの子女の子だったの。男の子にしか見えなかった」と言われたり、近所の商店のおばあさんからは「坊主」と呼ばれていたそうです。母は当時の話を笑い話として伝えてくれましたが、その当時は、言われた事を気にしてしまい落ちこむ事もあった様です。

私のように、病気等で髪の毛を失った子供とその家族の気持ちについて考えてみました。“命さえ助かれば”という想いで必死に病と戦っている時には、もしかしたら周りの人を見る余裕など無くて、好奇心で見られる事や容姿について言われる事も気にとまらないかも知れません。しかし後になってふと思いつく度に心が痛むのかも知れません。そんな事を考えながら私は腰まで伸ばした自分の髪の毛を見ました。男の子に間違われたり好奇心で見られる事に耐えながら、やっと生えてきた髪の毛。そして伸びていく髪の毛に愛着が湧

き、切る事ができずにここまで伸びた髪の毛。私はその想いが沢山もっている髪の毛を、今現在悩んでいる子とその家族へバトンタッチしたいと思いました。それでヘアドネーションをやってみたくて母に伝えた時母はどこか踏み切れない様な面持ちでした。「今となっては成美の長い髪はトレードマークなんだよ…ここまで伸びるまで4年もかかったから淋しい気がする。」と母は言いました。それでも困っている人の役に立てることは素晴らしい事だからと私の意見を尊重してくれました。「40センチは切る事になるよ。本当にいい？」美容院の人に再び問われた時「はい。お願いします。」私はうなずきました。切った毛束に“今悩んでいる子供とその家族が笑顔で過ごせる日が、一秒でも早く訪れます様に”と願いを込めました。最初は踏み込めずにいた母でしたが、「やって良かったね。短い髪もよく似合ってるよ。」と言ってくれました。そしてこの髪の毛の、ウィッグがどこかで役に立てる事の喜びを2人でわかち合いました。幸せのバトンタッチです。

世界の人々は、肌が黒い白い、背が高い低い、目が大きい小さい、耳が聞こえる聞こえない等の様々な個性があふれています。それを許容し、認め合える世界になる事が私の望みです。一人一人がありのままの自身の姿に誇りを持って生きてほしいと思います。そして、共に生きやすい世の中になる事を心の底から願っています。物理的にも心理的にも困る人が居ない世の中にするために、私に出来る事を一つ一つ見つけて実行していきたいと思っています。私は今再び髪を伸ばしています。ヘアドネーションをやろうと決めています。

いつの日かヘアドネーションによるウィッグが、隠すためではなく魅せるためのプレゼントになる事を願っています。そういう世界になるまでは、そう時間はかからないと私は信じています。そう遠くない時期に今よりも更に笑顔があふれる世界になっている事でしょう。

ヘアドネーションをした事は私の中で共に生きる喜びを知れた良いスタートになりました。

# 「全ての命を大切に」

加須市立騎西中学校 3年

林 紗愛



思い出すのも辛いような主張のテーマでしたが、学んだ事も多く、主張を通して伝えられたことを嬉しく思います。ありがとうございます。これからも命の大切さを発信していきたいです。

みなさんが考える命の重さはどれくらいですか？ SNS での誹謗中傷に耐えられず自殺したり、我が子を虐待死させてしまったりと最近耳にする大変痛ましいニュース。私はそれらを聞くたび、心がズキズキし、いたたまれない気持ちになります。そして、「命ってこんなに軽いものなのか？」と自問自答するのです。私が命について深く考えるようになったのには、理由があります。それは、飼い猫の死産に直面したことによります。

ある日、私がいつものように学校から帰ると母が家の窓から悲痛な面持ちで、「死んじゃう死んじゃう。」と叫んでいました。私は、最初「何事か？」と思い、とにかく母から事情を聞こうと中に入りました。するとそこには、猫が今にも力がつきそうな状態で寝ていました。私はこれはこの猫の最期かもしれないと思い、おやつをあげたり、体をなでたりして過ごしていました。しばらくすると、猫のいた場所に、一匹の子猫が息の絶えた状態で横たわっていました。私は、しばらく茫然としてしまいました。母猫の妊娠を知らなかったのも、まさか出産するとは思ってもよらなかったということも一因ですが、母猫は生きているのに、子猫は死んでしまったという現実、頭が追いつかず、状況を受け入れることが困難だったからです。

その後、家族で今後について話し合いをしました。私は早く埋葬したかったのですが、母の、「母猫が死産した子猫を食べてしまうことがあるらしいけれど、それは母猫にとっては自分の中に子猫を取り入れて、一緒に生きていくという判断かもしれないよ。」という言葉に納得し、その日はそのまま置いておくことにしました。幸運にも翌日も同じ場所に子猫は眠っていました。私はなぜだかとても安堵しました。しかし、その日を境に、普段鳴かない母猫が、子猫を埋葬した庭を向いて切なく悲しい声で鳴く姿を何度も目撃しました。その度に私も心をぎゅっとつかまれたようになり、

母猫を抱き上げ、なで続けました。

母猫の死産に直面し、私はいろいろなことを感じ学びました。そして「命」について深く真剣に考えるようになったのです。

まず、生まれてくることすらできない命があることを知り、衝撃を受けました。「当たり前」のありがたさを痛感し、不自由なく生活できる今に感謝しました。

そして、大切な命を失う途方もない絶望感、果てのない悲しみを感じました。身近な命が果てるという経験は、言葉では言い表せないほどです。人間は一人では生きられず、周りに支えられながら生きているということの実感につながりました。

また、先ほどの一件から私は、亡くなった子猫の分まで、今飼っている猫を大切にしようと決心し、命を育てています。周りからみたら、「ペット」に過ぎないと思われるかもしれませんが、でも全く違うのです。家族なのです。だからこそ、この世に生を受けている全ての命を素晴らしいもののだと考えるように至りました。

冒頭に述べた通り、今毎日のように悲しいニュースが世間を賑わせています。でも私は声高に叫びたい。「命を大切にしてほしい。」と。自分の命を大切にすることは勿論、周りの命も同様です。これは我々人間だけではなく、動植物等、生物全般に言えることです。

私は今後、「命の大切さを訴える活動」にも力を入れていきたいと思っています。

まずは、生徒会本部役員という立場を生かして、行事に取り入れていければと考えています。自分にできることが些細なことでも、今後悲しいニュースがなくなるような明るい未来に進めるよう尽力していきたいです。命の重さは比べることもできないし、はかることもできませんが、重いものだと忘れることなく。

## (高校生・一般の部 最優秀賞)

# 「アンコンシャス・バイアス」

埼玉県立豊岡高等学校 1年  
高橋 緒夏



多くの方の前で自分の考えを主張する機会は少ないので、このような場で発表できとても良い経験でした。疑問に思ったことを考え、人に伝える大切さを改めて実感しました。有難うございました。

アンコンシャス・バイアスとは、自分では気づかないうちに心の中に持っている、ものの見方の「無意識の『偏り』」のことです。

先日、ある記事を目にしました。見出しには「誰もが持つ無意識の『偏り』」と書かれていて、私はその記事にとっても興味を持ちました。さらに詳しく知りたいと思い、調べていくと、いろいろ考えるところがありました。

私たちは、生活している中で、根拠のない思い込みや偏見を少なからず持っています。例えば「あの子は、真面目そうだから学級委員になるべきだな。」や、「女の子なのに女の子らしくない。」など、無意識のうちに思ったことはありませんか。

では、なぜアンコンシャス・バイアスが生まれてしまうのでしょうか。私はこう考えました。その人が当たり前だと思っていることも、時代が進むにつれてそうではなくなってしまうことに気づいていなかったり、認めていなかったりしているからではないでしょうか。

皆さんは「親が単身赴任中」と聞いて、母親と父親、どちらを思い浮かべますか。父親が単身赴任中なのだと思います。なぜ、父親の方を思い浮かべたのか考えてみます。一番の要因は、「父親が外で働き、母親が家にいて家事をする」というのが当たり前の時代があったからだだと思います。もう一つ考えられるのは、アニメやドラマの影響です。そこで出てくる家族は、だいたい母親ではなく、父親が「単身赴任」する設定です。このようなことからアンコンシャス・バイアスが生まれてしまうのでしょうか。

私にも、アンコンシャス・バイアスの経験があります。「真面目だものね。」「塾行ってるから、頭いいよね。羨ましい。」というものです。「自分は真面目でもないし、塾通ってるからって、頭いいわけはないのにな。」と、自分を決めつけられた気がし

て悲しくなりました。「真面目だね。」と言われて、嬉しいと感じる人もいると思いますが、一人一人思っていること、解釈は異なります。

アンコンシャス・バイアスの良くない点は、無意識に自分の考えを押しつけたり、決めつけたりしてしまうことです。自分自身のことについてもあてはまります。「私は、絶対にできないから。」と決めつけてしまうのも良くないと思います。全て否定してしまうのではなく、挑戦してみた方が得だと思います。行う前から自分の可能性を否定してしまうなんてもったいないです。

アンコンシャス・バイアスについて、身近な例をあげてきましたが、世界にはアンコンシャス・バイアスによって困っている人がたくさんいます。LGBTQ(性的少数者)や高齢者の仕事、外国籍の人材などさまざまな問題があります。アンコンシャス・バイアスを取り除くためには、アンコンシャス・バイアスの内容を理解し、自分の生活の中からアンコンシャス・バイアスに気づき、決めつけたり、押しつけたりするのを改める努力をすべきだと思います。

アンコンシャス・バイアスは、日常にあふれています。誰にでも多少、思い当たることがあると思います。しかし、自分自身では意識しづらいので、無意識に相手を傷つけたり、苦しめたりしていることに気づかないことがあります。私もその一人かもしれません。したがって、自分自身に「思い込み」や「決めつけ」がないか、気づきのアンテナを立てることが大切だと思います。また、もし不用意なことを言われて嫌な思いをしたら、それを言葉にして相手に伝えることが大切です。なぜなら言った本人は「無意識」なのですから。お互いを理解し合い、感じ方の違いを共有することで、「偏り」がなくなり、良い関係性を築けると私は思います。



## 「見えない差別」

埼玉県立草加南高等学校 3年

渡辺 なみえ



コロナ禍で開催して下さった関係者の方に感謝致します。他の方の発表を聞き色々な価値観にふれ私自身とても良い経験になりました。このようなすばらしい賞を頂きありがとうございました。

「あなたは日本人じゃないんだから人一倍努力しなくちゃだめよ。」

この言葉は、幼い頃から母が私に何度も言う言葉です。私は日系ブラジル人です。このことを言うと友達はず「ハーフなの？」と聞いてきますが日系人とは日本から外国に移住しその国の市民権を得ている人のことを言います。私は、両親と違って日本生まれ日本育ちです。全く外国人という意識はありません。しかし、「自分は日本人じゃないんだな。」と思わなければならないときがあります。それは在留カードの更新をするときです。在留カードは日本に中長期間在留する外国人に対して交付されるカードのことでそのカードに記載されている項目の中で重要なのが在留資格というものです。つまりこの在留カードがないと私は日本に住むことができません。そのためカードに書かれている期限前に必ず更新をします。このときに「自分は日本人じゃないんだな。」と思います。

実際私は、ブラジル国籍といって不便なことはありませんでした。しかし、最近父と姉が喧嘩したときに父が「俺は早くブラジルに帰りたいんだ。もうゆみは会社に入社したし自分で生計がたてられるようになった。だからなみえが大学に行く気がないならすぐ帰りたいし大学に行きたいならサポートはする。俺はもう今まで頑張ってきたんだしこんな住みづらい国からでていきたいんだ。」と言いました。父がこんなにはっきりと帰りたいと言ったのは初めてでとても驚き、同様に悲しくもなりました。その日以来誰もが住みやすい環境作りが必要だと強く思いました。そして、日本が抱える問題を調べたり聞いたりし始めました。

母に聞いたときに一番最初にあがった問題が差別問題です。日本でも差別については問題視されています。現在日本には女性の人権問題、子どもの人権問題、高齢者の人権問題、障がい者の人権問題、服役を終えた人などの人権問題、HIV感染者などの人権問題、同和問題、アイヌ民族の人権問題、外国人の人権問題などがあります。みなさんはいくつ知っていましたか。私は調べなければ知らなかった問題がたくさんありました。また男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数では日本は156か国中120位と下から数えた方が早くなっています。この結果から日本は差別問題において意識が低く、遅れていることがわかります。

差別とは実はとても身近にあるものです。例えば、私たち外国人が部屋を借りるときの保証人や保証会社を使用するときの費用が日本人より高くなったり外国籍というだけで部屋が借りられなかったりするのです。同様に外国籍だから入社を拒否する会社もあります。外国人だから発生する費用はあるのに対し外国人だから給与や手当が多くもらえることは一般的にはなく同様のポジションにつく外国人会社員と日本人会社員の生活水準はなかなか同じになりません。このように調べてみてこそ、母が日本人より人一倍努力しなさい。と言う理由が分かりました。そして父が日本が住みづらいと思う理由も分かりました。

私はそんな日本を変えていかななくてはならないと思います。現在日本の総人口を占める外国人の割合は2015年の1.5パーセントから2.2パーセントに上昇していて特に2020年の外国人増加率は43パーセントと大きく増加傾向にあります。一方、もともとの日本人の人口はどんどん減少していきます。いろいろな国から集まってくるたくさんの国々の人々が一緒にこれからの日本を作っていくことになるのは必然です。

差別解消への取り組みは、国際機関や行政などが行う一方で、潜在的な私たちの意識における差別をなくさなければ解決することはできないと思います。条約や法律で禁止したところで意識の中に差別が芽生える可能性はどんなところにもいつでもあります。完全になくすことはできなくとも抑制することや長い時間をかけて解消していくことはできていると思っています。差別の原因は偏見や意識の歪みであってこれは私たちが生まれ持つものではなく、生まれてきた環境や教育によって形成されていくものです。その偏見が今後生まれないようにするには次の世代の子どもたちへの偏見を持たない環境と教育が重要だと思います。さまざまな差別は皆さんの心の持ちようだけで変わります。ほんの小さなことでいいです。それぞれの違いを認め合い理解しようとするを自分たちでもできることから始めましょう。例えば、勇気を出してボランティアに参加してみる。手話を習ってみる。車で車椅子の人に手を貸してみる。などです。それが誰もが住みやすい環境作りに必ずつながります。私の主張によって一人でも日本の社会が抱える問題について興味を持ったり調べたりすることで意識が変わることを強く願っています。

# 「考えることを 止めない」

星野高等学校 1年  
二瓶 優月



3年ぶりに大会に出場することができ、心地よい緊張感と達成感を味わうことが出来ました。他の方の発表を聞き大変勉強になりました。コロナ禍で大会を開催していただき関係者の方に感謝致します。

男の人が日傘を差すことは、少し前までは見かけない光景でした。昔の日傘は、白くてレースのようなデザインがほとんどで、とても男の人が持つようなものではなかったからです。きっと白いレースの日傘をサラリーマンが差していたら変わった人と見られたと思います。でも男の人が直射日光に当たって良い訳ではないし、熱中症にならない訳でもありません。だけど白いレースの日傘をサラリーマンは差しません。なぜなら『無し』だからです。

私達は知らず知らずのうちに『有り』か『無し』か、いわゆる普通か普通じゃないかを頭の中で分けて、自分もその結論のもと、『有り』の方でいなければならないと思っているのだと思います。『有り』か『無し』かを決めることは毎日繰り返されます。朝起きて家族との挨拶の態度も、鏡の前でセットする髪型も、学校で休み時間に友達と喋る話の話題も、『有り』を選び続けければ時間はスムーズに流れて、なんて楽しい日だったのだろうと眠りにつきます。逆にどこかで『無し』を選んでしまうと、そこから立ち直れない程のダメージを受けることもあります。

私達は『無し』を選ぶことに、とても恐怖を感じます。だから『無し』の人の行動や見た目、様子などを見かけると、笑ったり、見て見ぬふりをしたりします。自分が『有り』にいてことで気持ちが大きくなるのです。「みんなが思う方はどっちだ?」「正解はどっちだ?」と毎日繰り返し、時には自分の意見を押し殺して『有り』な自分を演じていることもあります。もし自分が思っていることしか言えなくなったら世界はどう変わるのだろう。時々本当の自分の気持ちや意見を言えなかったとき、そんなことを考えます。

家族で買い物に出かけたとき、中学生くらいの男の子が店の前で寝転んで大泣きしていました。私は、「寝転がるほど泣かなくてもいいのにね。」と笑いながら母に言いました。少し経つと今度は立ち上がって物凄い速さで店の中をグルグル走り出しました。私は頭の中で『無し』と思い、「なんか凄いな。」と言いました。母は、「自閉症かな…お母さん大変だろうな。」と言いま

した。時々変わった行動や独り言を言う人を見かけます。「そういう人も自閉症なの?」私は、母に聞いてみました。「中には自閉症の人もいるよ。自分ではどうしようもないの。生まれ持った特性だから。」と言いました。寝転んで泣いていた子は自閉症という特性を持つ子でした。一瞬でも『無し』だと思った自分が恥ずかしいと思いました。

自閉症はどんな特性なのか、私はとても気になりました。本屋さんで『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』という小説を見つけました。私はその小説を読み、自閉症がどんな特性を持つのかを知り、胸が詰まり何とも言えない気持ちになりました。自閉症の人は、相手の目を見て話をしたり、自分が思ったことを言葉にしたり、相手が何を思っているのか考えたりすることが、難しかったり、苦手に感じたりするそうです。

それはまるで、純粹に思った気持ちを伝える小さな子供のようにだと、私は思いました。寝転んで泣く程の悲しい思いや、嬉し過ぎて飛び跳ねてしまう思いは、誰もが年少期には当たり前でしたが、いつしか自分の気持ちも押し殺し、自分は色々考えているようで、実は何も考えなくなってしまったのではないかと、私はハッとしました。

寝転んで泣く姿を見て、私は笑っただけで、何故そんなに悲しいのか、お母さんはどんな気持ちなのかなど、何も考えていませんでした。小さい頃、私が泣いた時は、必ず寄り添ってくれる大人がいました。自閉症の人のそばにも笑う人ではなく、寄り添って理解してくれる人が必要だと、小説を読んで気付きました。

自閉症に限らず、世の中の色々な人や物事に対して、もっと真剣に向かい合う必要があると思います。男の人用の日傘を考えた人は、どうしたら熱中症が防げるか、日傘の本当の意味を考えた、強い心と優しい心を持っている人だと、私は思います。

自分が持っている知識や常識だけで、『有り』か『無し』かを決めるのではなく、色々な人の意見を聞き、自分で考えて、本当の答えを見つけることが出来る、強い心と優しい心を持つ大人に、私はなりたいと思いました。



## 「相手の立場になって」

埼玉県立熊谷西高等学校 1年

根本 美空



本大会に参加して、他の方々の主張を聞き自分の考え方や心の在り方が大きく刺激され自身成長することが出来ました。何より、このような場で自分の意見を主張できたことが本当に嬉しかったです。

人に嫌なことをされた経験はあるだろうか。誰しもある事だと私は思う。生きていてストレスを感じた事のない人間はいないだろう。では逆に、人に嫌なことをした経験はあるだろうか。これに関しては「した事なんか無い」と答える人もいるかもしれない。しかし、これも誰しも当てはまる事だと私は思う。自分が相手に何かをされた時、「嫌な事をされた」と感じるように、相手側も少しでも「嫌だ」と感じる事があればそれがどんな事であっても、自分が「人に嫌な事をした」事実になってしまうのだ。

そういった事を再認識させられたのは、夜中にふとテレビをつけた時たまたまやっていた、『戦後76年プロジェクトつなぐ、つながる』の特集がきっかけだった。過去・現在・未来を「つなぐ」、各世代が、世界が「つながる」。このプロジェクトは、薄れゆく「戦争の記憶」を次世代につなぎ、未来の平和につなげる事を目的とするもので、私が見たものは「綾瀬はるか『戦争』を聞く～真珠湾攻撃80年婚約者はハワイに散った～」という特集だった。その内容は、太平洋戦争の発端となった(現在から)80年前の真珠湾攻撃で婚約者を失った中野ミコマさんと2010年にハワイを訪れた、綾瀬はるかさんが11年を経て中野さんの御令孫と御曾孫と共に中野さんの旅を振り返り、次の世代へ戦争の記憶を引き継いでいくというものだ。11年前、ハワイのオアフ島にある真珠湾(パールハーバー)に着いた時、中野さんは「ここまで来てから誰も彼もアメリカ人が憎たらしくなるの。」と言った。「あんたたちが(婚約者を)殺したんじゃないのと言いたくなるの。」婚約者への想いとアメリカ人に対する戦争の怒りが入り交じった彼女の険しい感情の現れに私は声を吞んでしまった。そして、中野さんと綾瀬さんの訪問を知って元アメリカ兵の方々が集まった時、中野さんは真剣な顔で彼らに聞いた。「12月8日どうされておったですか。」中野さんはその日がなんの日かを元アメリカ兵の方に告げた。1941年のその日は、中野さんの婚約者が航空兵として真珠湾攻撃に参加し、アメリカ軍に撃墜された日だった。私は胸が詰まる思いで、食い入るようにテレビの画面を見つめた。アメリカ兵の方は、遠くを見つめるような悲しい目をして答えた。「ごめんなさい。でも彼は彼の仕事、私は私の仕事をしていただけなんです。」私ははっとした。ずっと日本人の目線でしか戦争

を捉えていなかったのだ。中野さんもそうだった。その後訪れたのは、日本軍に撃沈された船艦の真上に建てられたアリゾナ記念館と展示館。壁一面にアメリカ軍の死亡した乗組員全員の名前が刻まれている碑や、日本軍の攻撃で亡くなった人たちの写真を見た彼女は強い衝撃を受けていた。私も同様な衝撃を受けた。アメリカ側の被害を自分の目で見て確認したのは初めてだった。「悲しい物語ですね。」中野さんは静かな声で綾瀬さんに言った。それは、彼女の心の内の「憎しみ」が「悲しみ」に変わった瞬間だった。あれから11年が経ち、中野さんの旅を振り返った御曾孫が言った言葉は、私の心に強く残るものだった。「悲しい思いをした人がどちらにもいたんだなっていうのを(中野さんと)一緒に気付くことが出来たのが印象に残っています。」悲しい思いをした人がどちらにもいる。戦争では、勝っても負けても双方に悲しみや苦しみ、憎しみしか与えない。私たちにハッピーエンドをもたらしてくれる事なんか一度も無い。たとえ戦争によって科学技術が進歩したとしても、その分人々の心、命は失われていくのだ。「戦争は無益だ。」私は心の中で叫んだ。悲しい思いをする人をただただ増やしていく事にどんな存在価値があるというのだろうか。

戦争についての様々な想いを張り巡らしながら、私はふと、父から言われていた言葉を思い出していた。「自分がされて嫌な事はしない。」私と妹が喧嘩をしている時、父はいつもこう言って私達の間に割って入った。私と妹の喧嘩は父によって収められた。だが、第三者に頼ってばかりでは自分にとっても相手にとっても根本的な解決には何もつながらない。要するに、相手の立場になって考える事が必要なのだ。私たちは人の心を読む事が出来ないし、それぞれで性格や感じ方、考え方も違う。そのため対立が起こってしまう。しかしそれは生きていく中では避けられない必然的な事なのだ。どうやって対立を避けるかを考えるより、相手と向きあって意見を伝えあい、互いを認めあえるようになる事が大切だと私は思う。相手の気持ちを理解する事が難しくても、まずは父の言葉のように自分を基準にして相手の立場になって考えていけばいい。

戦争の無い平和な世界を目指すためには、一人一人が相手の立場になって物事を考え、互いに認め、支えあって生活していく事が必要だ。



## 「誰かを思いやるために」

埼玉栄高等学校 2年

橋本 美羽

私の祖母は聴覚障害者だ。年齢と持病の影響で徐々に聞こえなくなり、今ではほとんど聞こえていない。みんなの会話はニコニコ参加しているように見えるし、祖父とは普通に会話している。だから私は最近まで祖母の耳が聞こえていないことに気づけなかった。しかし、考えてみるとテレビには字幕がついているし、祖母に話しかける祖父や父の声は大きくなっている。私が声をかけても反応がないことがあり、変だなと感じたこともあった。祖母の耳が聞こえていないことに私は戸惑い、どうすればいいのか分からなかった。耳が聞こえない人は聞こえていないことに気づかない。だから危険なことも多いだろう。祖母が事故にあったりしないか、聞こえなくて困ることがないかなど心配になった。

「聞こえない」ことについて調べていたある日、家のポストに1枚の広報誌が入っていた。さいたま市の社会福祉協議会の広報誌だった。そこには私たちには分からない聴覚障害の実態が載っていた。クラクションの音が聞こえないため歩道のない道がより危険になるそうだ。さらに筆談も長文になると分かりづらく、コロナ禍ではマスクで口が見えずより伝わりにくい。「聞こえない」ことが見た目では分からないため聞こえていないのに「無視している」と誤解されることもあるという。聴覚障害の理解がもっと広まってほしいという声があげられていた。聴覚障害の症状は人それぞれだという。だからどの方法が最も伝わりやすいのかも人それぞれだと書かれていた。私の知らないことばかりだった。筆談にすれば伝わりやすいと思っていたし、マスクの不便さも私は何も感じていなかった。「目が見えないよりは平気そう」そんな風に思ってしまった。しかし改めて考えてみると日常生活は音であふれている。私たちは当たり前のように様々な音を聞いて情報を得て生活している。インターフォンの音、お風呂が沸いた音、病院の窓口の声、駅のアナウンス。防災無線や緊急地震速報など、危険を知らせる情報は音や声で伝えられることが多い。これらの情報が入って来ないことを考えるととても不便で怖い。「聞こえない」ことが伝わらないこと。それが一番不便かもしれない。だから「聞こえる」人たちが「聞こえない」人たちのアクションを見逃さず、反応がないときは聞こえていないのかも



自分の思いや主張が誰かに届いたという実感を感じられたことが嬉しかったです。自分の思いを多くの大人に主張できる機会はなかなかないので今回このような貴重な体験ができて良かったです。

しれないと想像をして、身振り手振りやイラストなどで工夫して伝えることが必要だと思った。祖母に会ったとき私はこれまでに得た情報から、口をなるべくはっきり開けて話すようにした。筆談をするときはより簡潔に伝えるようにした。用があるときは声をかけるのではなく、肩をたたくようにした。いつもより伝わっているようで祖母の笑顔が増えた。私も嬉しかった。何をすれば相手の役に立てて、どうすれば喜んでもらえるのかを考えること、相手に聞くことが大切なのだと思えた。

「傍目八目」という言葉がある。第三者の方が当事者よりも正確な判断が下せるという意味だ。当事者であると物事を客観的に、冷静に判断するのが難しくなるからだ。私の祖母の場合、祖母自身は聞こえていないことにあまり気づいていない。だから私たち周りの第三者が祖母の「聞こえない」という問題をたくさん考える必要がある。私たちのちょっとした思いやりとアイデアで障害者の不便を解決できることが多いと広報誌に書いてあった。障害は当事者だけの問題ではない。ノーマライゼーション、障害のある人もない人も同等に生活し、ともに生き生きと活動できる社会を実現するためには私たちの協力なしでは難しい。自分には関係のない問題だと思うかもしれない。私はたまたま身内に聞こえない人がいた。だから調べて考え、あの広報誌が目付いたのかもしれない。でも調べて分かった。知らないは何もできない。正しい知識がなければ正しい気遣いはできない。やはり知ること、当事者よりも考えることが思いやりへの第一歩になるのではないかと思う。だからもっともっとみんなに知ってほしい。社会福祉協議会のようにみんなに知ってほしいと願っている小さな声を取り上げて、伝えようとしている人たちがいる。しかしその声はなかなか私たちには届かない。SNSが普及している今の時代、情報収集はSNSを使うことが多い。回覧板も広報誌も見ない人が多いだろう。SNSやマスメディアをもっとうまく活用してこの情報をみんなに伝えてほしい。知る機会を、考える機会をつくって、正しい気遣いができる人を増やすきっかけにしてほしい。みんなが生きやすい優しい世の中になればいいと思う。

## 特別賞の紹介



「Humming Bird未来基金」特別賞  
三郷市立早稲田中学校 3年  
ムフタル フララさん

ムフタル フララさんは「ウイグル人」として日本で生まれたことで幼少の頃から切ない思いを抱えています。その思いは彼女のとても素直な言葉で表現され、拝聴しながら胸が痛くなるほどでした。また新疆ウイグル問題に対しても思慮深く捉えており、幼少の頃からの思いや経験が彼女をより早く大人に成長させたのでは、と感じました。説得力のある、勇気を感じる主張でした。そして、何よりもムフタルさんの祖父母に対する深い愛が感じ伝わりました。

当基金は国内外に於いて、企業の社会的責任の一環として、医療、教育等の機会に恵まれない子供たち、そして未来を紡ぐ子供たちを支援しております。ムフタルさんがこれからも強く、そして思いやりのある優しい女性として成長されますことを心から願います。



「WATABOKU」特別賞  
さいたま市立西原小学校 6年  
鈴木 昊一郎さん

「夢の箱（ドリームボックス）はもういない」はワンちゃんネコちゃん所謂“愛玩動物”の飼育放棄に伴う殺処分をテーマとした内容でした。ペットの生死について、人間に置き換えた考察や鈴木さんの家族である愛犬“柴子ちゃん”の心温まるエピソードを織り交ぜた素晴らしい発表でした。弊社森乳業は牛乳を中心に様々な乳飲料を製造しています。その牛乳を生み出してくれているのは牛です。愛玩動物ではなく経済動物とか産業動物と称される動物ですがこれらの動物も生き物として生死があります。鈴木さんの発表によって様々な動植物の生死について改めて考えさせられました。この度は受賞おめでとうございます。



「輝け・明るく・裕（ゆたか）に」特別賞  
埼玉県立草加南高等学校 3年  
渡辺 なみえさん

いま見えている偏見のほかに、当事者にしかわからない思いに気づくことを改めて感じました。また、「自分たちの意識を変えることが、差別解消につながる。それぞれの違いを認めあい、理解することについて、できることから始めよう」という主張に共感しました。

子供たちが多様な考え方や価値観を認め合い、学びを深め一生懸命頑張ってほしいと思います。夢や未来の姿に向かい、実現に向けた自信と決意のある作品が希望のキーワード「輝け・明るく・裕（ゆたか）」となるように特別賞を贈りました。



「ポジティブネット YMCA」特別賞  
埼玉県立豊岡高等学校 1年  
高橋 緒夏さん

最近よく耳にする言葉「アンコンシャス・バイアス」。私たちの心の深いところで無意識にある偏見・差別・思い込み。それらに気づきのアンテナを立てて、お互いを理解し合い、違いを共有することの大切さを伝える思いが「互いを認め合い、高めあうポジティブネットのある豊かな社会」と「みつかる・つながる・よくなっていく」スローガンに合致したことにより選出いたしました。次世代を担う青少年が、自分の思いを地域や社会に発信し、行動していくことを埼玉YMCAは支え続けていきます。





「埼玉キワニスクラブ」特別賞  
越谷市立中央中学校 3年  
甲斐 迅翔さん

小学校4年生の時の読書感想文が一人の大人を笑顔にさせ心に残っていたことを知り、言葉のもつ力の偉大さに気付いた甲斐迅翔さん。言葉は人の心を動かす力があり、人を励ますことも傷付けることもある諸刃の剣、慎重に言葉を選んでいかなければならないことを知って、人を温かく優しい気持ちにさせる言葉を使えるようになりたいとの思いが伝わり、感銘を受けました。

埼玉キワニスクラブでは、未来を担う子ども達のために社会奉仕活動を行っています。甲斐さんが「よろづの言葉」で人の心を動かす文が書けるようになることを期待しています。



「Next Action 埼玉りそな銀行」特別賞  
三郷市立新和小学校 4年  
高田 真帆さん

日本にいるたくさんの外国人が日本語の壁で困っているという問題に対し、「日本語指導のボランティアは大人ばかりで子供だからこそできる、伝わることはないか」と自ら考え、行動する姿勢に感銘致しました。「Next Action」を心掛ける弊社も共感し、選出させていただきました。

高田さんの、ボランティア活動を通して得た「人の思いがあれば、国境は越えられる」という言葉は正に多様性を重んじる現在の社会課題解決に通じるはずです。今後の「Action」により一人でも多くの外国人の方が日本の良さを理解し好きになってくれることを期待しております。



「テレ玉」特別賞  
埼玉栄高等学校 2年  
橋本 美羽さん

耳の不自由な祖母とのコミュニケーションをきっかけに、相互理解に必要な事は正しい知識とちょっとした思いやり、そしてアイデアであると橋本美羽さんは主張しています。

近年、インターネットメディアは急速に発展を遂げ、マスとソーシャルが織り交ざったメディア環境はより多様化が進んでいます。一方、我々の暮らしに必要な情報はより複雑になったメディアの中に埋もれてしまい、情報格差が年々深刻化している事も事実です。

こうした社会の問題点に気づいた上、気遣いが出来る人を増やすことが優しい社会づくりに必要であると説いた視点に賛辞と特別賞をお贈り致します。



「埼玉新聞社」特別賞  
日高市立高根小学校 6年  
土屋 憲太郎さん

親や兄弟、友人を問わず、とかく自分以外の人の欠点は見つけやすいですが、長所やいいところは見つけにくいものです。「ママのいいところ100個書いてね」と求めたママが素晴らしく、また100個書いた憲太郎さんもそれ以上に素晴らしいと感じました。憲太郎さんとママの会話からじんわりと温かい親子関係と、「生んでくれてありがとう」と言いたい気持ちになった憲太郎さんのママへの感謝の思いが伝わってきました。



# 講 評

## 埼玉新聞社編集局長 砂生 敏一



15人の発表者の皆さん、本日はお疲れ様でした。また、各賞の受賞、誠におめでとうございます。

私自身、審査に初めて携わりましたが、皆さんの堂々とした発表に感銘を受けますとともに、また、内容についても改めて気付かされることが多くありました。

主張ですから、何を言いたいのか、何を伝えたいのか、何を訴えたいのかというのが明確でなくてはなりません。その点から申しますと、15人の皆さんが、日常生活や学校生活の中で鋭い観察眼を持ち、また、気付きから疑問に感じたことを自分自身に問いかけ、時には調べたり周囲の人に聞いたりしながら、豊かでナイーブな感性とともに強いメッセージ性をもって、堂々と主張されていたと思います。今日（こんにち）的な問題、社会的な問題、自治的な問題をテーマにした主張もあり、皆さんの社会に対する関心の高さが窺えました。

審査は、発表内容と表現力・発表態度の2点の合計得点で各賞を決めさせていただきましたが、どれも甲乙つけがたい内容でした。

まず小学生の部ですが、日常生活の中で「おかしい」とか「なんで」と感じた中から、暮らしやすさとか、より良い社会、共生社会になってほしいという思いが伝わってきました。また、そのためには一人一人がどのように行動すべきかということ強く主張されていたと思います。発達障害や動物の殺処分について、自分自身の考えをしっかりと述べたり、家族への感謝の気持ち、将来の夢に向かって今何をすべきか、これから何をすべきか、強い決意も伝わってまいりました。

中学生の部は、命の大切さや尊さ、時には儂さにも触れながら、「どう生きていくのか」、「アイデンティティとは何か」と、実際の体験を通じて自問自答しながら、「私はこう考えているのだ」と、そういう主張が多い印象でした。病気に直面した時にどう向き合ってきたのか、つらかった経験を糧に前向きに生きていこうという主張に心打たれました。国際社会の問題を改めて鋭く指摘する主張もありましたし、ジャーナリスト的な視点も非常に皆さん持っていると感じました。

高校生・一般の部は、全般的に「当たり前と思われることがはたして当たり前なのか」、他者との関係性のなかから、「なぜ偏見や差別があるのか」など、高校生らしくしっかり考察したうえでの主張が多かったと思います。今日（こんにち）ジェンダーということが、あらゆるところで広がっています。皆さんの主張を聞きながら、ジェンダーやノーマライゼーション社会を実現させるためには、互いに認め合い支え合うことがその一歩であるということ、改めて認識いたしました。

一人一人のテーマは異なりましたが、根底には皆さんが非常に思いやりのある方だと感じました。どうか今後も家族や周囲の人、他者に対して、思いやりを持って接して欲しいと思います。

最後になりますが、コロナ禍で非常に制約が多い中でも大会の開催に向けて御尽力いただきました主催者の方々に、まずは感謝申し上げます。また、日ごろから児童生徒さんを支え、見守っていただいている保護者、学校関係者の皆様、青少年の健全育成に御尽力いただいている方々、企業関係者の皆様に敬意を表しますとともに、次代を担う若者たちの明るい未来を祈念して、講評とさせていただきます。

# 令和4年度少年の主張埼玉県大会の概要

## 1 主催

埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議・  
独立行政法人国立青少年教育振興機構

## 2 協賛

Humming Bird未来基金・埼玉キワニスクラブ・公益財団法人埼玉YMCA・  
羽石電気工業株式會社・森乳業株式会社・株式会社埼玉りそな銀行・  
株式会社テレビ埼玉・株式会社埼玉新聞社

## 3 後援(順不同)

埼玉県市長会・埼玉県町村会・埼玉県市町村教育委員会連合会・  
埼玉県公立小学校校長会・埼玉県中学校長会・  
(一社)埼玉県私立中学高等学校協会・埼玉県高等学校長協会・  
埼玉県特別支援学校長会・埼玉県PTA連合会・  
埼玉県高等学校PTA連合会・埼玉県特別支援学校PTA連合会・  
埼玉県私立小学校中学校高等学校保護者会連合会・読売新聞さいたま支局・  
NHKさいたま放送局・FM NACK 5

## 4 応募作文数

小学生の部	19,530点
中学生の部	18,285点
高校生・一般の部	2,071点
計	39,886点

## 5 大会の概要

(日時) 令和4年8月21日(日) 午後1時00分～4時45分

(場所) さいたま共済会館 大ホール

(進行)

- ・開会
- ・挨拶(青少年育成埼玉県民会議副会長 前島 富雄)
- ・主張発表
- ・ミニコンサート
- ・審査結果発表
- ・講評(株式会社埼玉新聞社編集局長 砂生 敏一)
- ・表彰式
- ・閉会

## 6 審査員(敬称略、順不同)

### (1) 第一次審査員

小学生の部・中学生の部 (令和4年7月8日(金)審査実施)

新井 栄司	埼玉県退職校長会
小島 健司	埼玉県退職校長会
羽島 隆夫	埼玉県退職校長会
眞嶋 廣久	埼玉県退職校長会

高校生・一般の部 (令和4年7月1日(金)審査実施)

伊古田 陽子	埼玉県高等学校等退職校長会
小林 一郎	埼玉県高等学校等退職校長会

### (2) 第二次審査員

加藤 雅教	埼玉県公立小学校校長会 幹事長
伊藤 潔	埼玉県中学校長会 副会長
高岡 豊	埼玉県高等学校長協会 会長
石井 志穂	埼玉県高等学校PTA連合会 会長
砂生 敏一	株式会社埼玉新聞社 編集局長
前島 富雄	青少年育成埼玉県民会議 副会長
柿沼 トミ子	青少年育成埼玉県民会議 副会長
芦澤 吉一	青少年育成埼玉県民会議 副会長
石川 薫	埼玉県教育局県立学校部長
田沢 純一	埼玉県県民生活部県民共生局長

## 令和4年度 賛助会員の皆様

青少年育成埼玉県民会議は、次代を担う青少年の健全育成のために以下の企業・団体に賛助会員として御協力をいただいています。(50音順)

赤城乳業(株)	(株)埼玉新聞社	(株)ハイデイ日高
アルディーザ後援会	埼玉信用組合	羽石電気工業(株)
(株)アルビノ	埼玉トヨペット(株)	Humming Bird未来基金
(株)イワコー	埼玉ホーチキ(株)	東日本電信電話(株)埼玉事業部
浦和北ロータリークラブ	(株)埼玉りそな銀行	(株)ビズヒッツ
(株)エフエムナックファイブ	(株)篠塚製作所	平田精工ジャパン(株)
化研興業(株)	(株)秀飯舎	(株)広野
カネパッケージ(株)	(学)城西大学	ベストセレクション(株)
関東自動車(株)	生活衛生同業組合埼玉県映画協会	本田技研工業(株)埼玉製作所
関東信越税理士会埼玉県支部連合会	生活協同組合コープみらい	増幸産業(株)
(株)キューブコンサルティング	たつみ印刷(株)	みはし(株)
(株)コア	(株)タンタカ	(株)武蔵野銀行
(株)サイサン	(有)つじ	望月印刷(株)
(学)埼玉医科大学	(株)テレビ埼玉	森乳業(株)
埼玉キワニスクラブ	東洋パーツ(株)	(株)八木橋
埼玉県小売酒販組合連合会	(株)東和銀行	リーディングテック(株)
埼玉縣信用金庫	中沢乳業(株)	
埼玉県信用金庫協会	(株)ナゴウェブ	
埼玉県ボウリング場協会	日本生命保険相互会社さいたま支社	
(株)埼玉シミズ	(株)日本標準統合物流センター	



# 令和4年度「家庭の日」ポスターコンクール入賞作品

優秀賞 (小学生の部)



「お父さんがおしたターザンロープは速い!!」  
久喜市立鷺宮小学校 6年 橋本 桜羽さん

優秀賞 (中学生の部)



「家まで走るぞーよいどん!」  
飯能市立飯能第二中学校 2年 山下 そよかさん

優良賞 (小学生の部)



「わくわくオートキャンプ」  
日高市立高萩小学校 4年 井上 寿一さん

優良賞 (中学生の部)



「家族と楽しい収穫祭」  
飯能市立飯能西中学校 1年 木崎 優来さん

優良賞 (小学生の部)



「家族との楽しい時間」  
伊奈町立小針小学校 4年 野口 麻衣さん

優良賞 (中学生の部)



「マスクの下は家族の笑顔」  
三郷市立南中学校 1年 真々田 愛良さん



# 令和4年度

## 「家庭の日」ポスターコンクール 最優秀賞・特別賞作品



最優秀賞（小学生の部）

「大好きな時間」  
桶川市立朝日小学校  
4年 永瀬 馨子さん



最優秀賞（中学生の部）  
「世界一おいしいおにぎりの食べ方」  
上尾市立原市中学校  
3年 落合 純鈴さん



埼玉県マスコット「コバトン」



埼玉県マスコット「さいたまっち」

「埼玉県映画協会」特別賞



「家族でザリガニつり大物だー!!」  
三郷市立彦成小学校  
3年 宮田 若奈さん

「株式会社イワコー」特別賞



「命育む」  
淑徳与野中学校  
1年 西澤 みうさん

「テレ玉」特別賞



「家族で花火」  
三郷市立彦成小学校  
5年 宮田 彩夏さん

「埼玉県美術教育連盟」特別賞



「プールにいったひ」  
三郷市立早稲田小学校  
1年 田中 美光さん